

The Journal of Egyptian Studies Vol.20, 2014

CONTENTS

Preface	Sakuji YOSHIMURA	3
Field Reports		
Report of the Activity in 2013, Project of the Solar Boat	Hiromasa KUROKOCHI and Sakuji YOSHIMURA	5
Preliminary Report on the Waseda University Excavations at Dahshur North: Nineteenth Season	Sakuji YOSHIMURA, Ken YAZAWA, Jiro KONDO, Shinichi NISHIMOTO and Koichiro WADA	13
Preliminary Report on the Sixth Season of the Work at al-Khokha Area in the Theban Necropolis by the Waseda University Egyptian Expedition	Jiro KONDO, Sakuji YOSHIMURA, Hiroyuki KASHIWAGI, Nozomu KAWAI and Kazumitsu TAKAHASHI	43
Articles		
An Experimental Approach to the Drilling Technology in the Predynastic Period: Cutting Capability and Reduction Patterns of Flint Micro-drills	Kazuyoshi NAGAYA	59
Reading the Kushite Texts in the Matrilineal Context: Enthronement Records and the Covenant between Alara and Amen-Re	Kumiko SAITO	83
Regional Variation of Stone Vessels in Predynastic Egypt	Keita TAKENOUCI	99
Comparison between the <i>frise d'objets</i> and Burial Goods: Focused on the Ornaments and Amulets	Seria YAMAZAKI	115
Report	Kikuro TAKAGI	131
Activities of the Society, 2013-14		145
Brief Reports of Fieldworks in Egypt, 2013		149
Editor's Postscript	Jiro KONDO	155

活動報告

2013 年度 早稲田大学エジプト学会活動報告

1. 総会

日時：2013 年 4 月 22 日（月）18：30-19：00

会場：エジプト考古学ビル 2 階

2. フォーラム、シンポジウム

(1) エジプト・フォーラム 22 『太陽の船プロジェクト再開～エジプトの争乱を乗り越えて～』

日時：2013 年 11 月 10 日（日）15:00-18:00

会場：早稲田大学大隈記念講堂（大講堂）

プログラム：

- ・基調講演「エジプトの社会情勢と早大隊のエジプト調査」

吉村作治（早稲田大学名誉教授・工学博士）

- ・パネルトーク「社会混乱期の文化財の情況」

コーディネーター：吉村作治

パネリスト：前田耕作（和光大学名誉教授）

中川武（早稲田大学教授・工学博士）

近藤二郎（早稲田大学教授）

宮下佐江子（古代オリエント博物館研究員）

黒河内宏昌（太陽の船復原研究所教授）

懇親会会場：大隈会館



吉村先生による基調講演



宮下先生によるシリアの報告

(2) エンターテイメントから見るエジプト文明 第2回『今甦る「ピラミッド再現計画」』

日時：2014 年 3 月 24 日（月）18:30-20:30

会場：早稲田大学小野記念講堂

登壇者： 吉村作治（早稲田大学名誉教授）
 佐藤孝吉（元日本テレビ取締役専務・エグゼクティブ・プロデューサー）
 白井裕泰（ものづくり大学教授）
 高安克明（(株)いまじん、プロデューサー）
 河合 望（早稲田大学准教授）



素晴らしい司会進行でした



プロの演出に感動しました

3. 定期研究会

(1) 第17回

日時：2013年4月22日（月）

会場：エジプト考古学ビル2階

発表題目：「アブ・シール南丘陵遺跡イシスネフェルト埋葬墓出土人骨の鑑定」

発表者：馬場悠男（国立科学博物館名誉研究員）

(2) 第18回（特別研究会）

日時：2013年6月3日（月）

会場：早稲田大学早稲田キャンパス11号館506教室

発表題目：「ピラミッド時代の王女と高官たち～アブ・シール遺跡の新発見～」

発表者：ミロスラフ・バルタ（チェコ共和国カレル大学教授、
 同大学エジプト学研究所所長・早稲田大学高等研究所訪問研究者）

(3) 第19回

日時：2013年10月21日（月）

会場：エジプト考古学ビル2階

発表題目：「土器づくりからみたさまざまなアジア：エジプト、台湾、バングラデシュ、インドネシア」

発表者：齋藤正憲（早稲田大学本庄高等学院教諭）

(4) 第20回

日時：2013年12月9日（月）

会場：エジプト考古学ビル2階

発表題目：「先王朝時代のものづくり～石器の複製・使用実験を中心に～」

発表者：長屋憲慶（早稲田大学文化構想学部助手）

4. 定期研究会発表要旨

(1) 「アブ・シール南丘陵遺跡イシスネフェルト埋葬墓出土人骨の鑑定」

馬場悠男

ラメセス2世の孫娘と考えられるイシスネフェルトの埋葬墓から出土した4体の人骨を整理・鑑定した。1号人骨はヨーロッパ系の小児である。胸椎が楔状に変形しており、ショイエルマン病の可能性が高い。2号人骨はヨーロッパ系の大柄な中年女性である。顔は細長い顎は頑丈で、歯の咬毛が進んでいる。骨盤は出産経験があることを示す。右脛骨に骨髄炎の所見が認められる。1号と2号では、顔の形態が酷似し、上顎切歯が大きいことのみがアジア系の特徴に一致する。鼻腔上面は破壊され、脳出しが行われたことを示している。また、同じように眉と髪を描いたような形跡がある。

3号人骨は、保存は悪いが、大柄な若いアフリカ系の女性と判断された。4号人骨は、極めて大柄なヨーロッパ系の若い男性と同定された。骨盤に骨髄炎の所見が認められる。4体のうちで、3号のアフリカ系女性と4号のヨーロッパ系男性は、イシスネフェルトとは考えられない。1号と2号は多くの特徴が酷似し、母子である可能性が極めて高い。もし、1号がイシスネフェルトなら、2号はその母親であってラメセス2世の息子の妻となるので、埋葬墓にはイシスネフェルトではなく彼女の名前が付いたであろう。従って、2号がイシスネフェルトであると考えると全てが整合する。

(2) 「ピラミッド時代の王女と高官たち～アブ・シール遺跡の新発見～」

ミロスラフ・バルタ

チェコ共和国エジプト学研究所は1991年以来アブ・シール南遺跡で調査を継続し、紀元前3千年紀の多くの墓を発見してきた。特に近年発見された古王国時代第5王朝の墓地は、極めて重要な高官や王族の墓を含んでいる。特に規模が大きい墓は、ネフェル（あるいはネフェルシェプス）の大型マスタバ墓で、それよりやや時代が新しいドゥアプタハ、シェプスプタハ、イティ、ネフェルの岩窟墓がある。さらに、前庭部に列柱空間を持つシェレトネプティ王女とネフェルインプウの岩窟墓がこれらの墓と隣接する。墓地は第5王朝のニウセルラー王の治世に年代づけられ、葬制における多くの変化を示している。たとえば、家族墓が出現し、王のピラミッドから離れて独立して造営された高官墓が現れることである。また、おそらくシェレトネプティ王女の墓があることは、近傍に埋葬された高官の一人と婚姻関係にあり、王が娘を有力貴族と政略結婚させることにより権力の維持を図ったことを示すと考えられる。2012年の調査では、ネフェルの岩窟墓の礼拝室と彫像室（セルダブ）を発掘し、彫像室からは多くの彫像が無傷の状態で見つかった。

これらの調査の成果は、考古学によって歴史的に価値のある資料が得られ、古王国時代第5王朝だけでなく古王国時代の崩壊の予兆についてもより多くの理解が可能となったことを示すものである。

(3) 「土器づくりからみたさまざまなアジア：エジプト、台湾、バングラデシュ、インドネシア」

齊藤正憲

土器づくり民族誌に関心を寄せる報告者は、まずはエジプトならびに台湾において現地調査を実施した。結果、東西アジアの対比が把握された。すなわち、エジプト＝西アジアではロクロ成形・昇焰式窯焼成であるのに対し、台湾＝東アジアでは叩き成形・覆い焼き焼成であった。では、東西アジアの中間／境界ではどのようなになっているのか？ その答えを求めてバングラデシュでの調査を計画・遂行した。結果、成形ではロクロと叩きが融合していた。焼成でも昇焰構造の施設を用いつつも、土器の焼成環境は覆い焼きであった。つまり、東西アジアの境界に位するバングラデシュでは技術の折衷が認められたのである。では、境界では

なく、辺境ではどうなっているのか？ 新たな調査地としてインドネシアを選定し、フィールドワークを実施したのである。結果、成形においては叩き、回転台、ロクロ、プレス機が共存し、焼成でも窯焼成と覆い焼きの両方が併存していた。技術が折衷した境界に対して、辺境では技術は共存するものであるらしい。そしてこの差異は、外来文化に対する姿勢の違いを示唆し、文化醸成のプロセスの違いをも物語るのではないか？ ならばここから、アジアの諸文化を境界型と辺境型に類型化し得る、境界／辺境論とも呼ぶべき視座が浮かび上がってくるのである。

(4) 「エジプト先王朝時代の穿孔技術～石器の複製・使用実験を中心に～」

長屋憲慶

本発表は、もの作りにおける基礎的技術の一つである穿孔技術について、実験考古学的手法からアプローチするものである。穿孔技術は、古代エジプトの工芸品製作において不可欠な技術である。ビーズ・パレットの孔、石製容器の把手、家具部材の接合部の孔など数多くの品々の製作に、この技術は用いられている。

こうしたエジプト固有のもの作りの始まりを想起させる資料として、先王朝時代の中心的遺跡であるヒエラコンポリスからは、フリント製小型ドリル (micro-drill) が多数出土している。しかし、このドリルを如何に用いて種々の素材 (石、骨角、木等) が加工されたのか、その具体的な方法は明らかになっていない。本研究は、実際にドリルを製作して様々な物質に穿孔を試み、使用後のドリル表面を観察することにより、穿孔技術の解明を目指した。

弓錐を用いた実験の結果、硬質石材 (紅玉髓) を含む全ての素材を穿孔 (貫通) できた。また、素材の硬度やドリルの操作法に応じて、先端部に特有のダメージ (剥離痕、形状変化) が生じることが観察された。さらに実験データと考古遺物との比較検討の結果、王朝時代の壁画等で見られる穿孔技術 (弓錐法) は、先王朝時代に既に存在していたと推察された。

5. 法人会員

早稲田大学エジプト学会の法人会員として、(株) 熊谷組、(株) ポニーキャニオン、RKB 毎日放送 (株)、(株) アケトにご支援をいただきました。ここに記して感謝いたします。

エジプト学研究 第20号

2014年3月31日発行

発行所 / 早稲田大学エジプト学会

〒169-8050 東京都新宿区戸塚町1-104

早稲田大学エジプト学研究所内

発行人 / 吉村作治

The Journal of Egyptian Studies No.20

Published date: 31 March 2014

Published by The Egyptological Society, Waseda University

1-104, Totsuka-chyo, Shinjyuku-ku, Tokyo, 169-8050, Japan

© The Institute of Egyptology, Waseda University